

蜘蛛と鴉

「おーい、呪われ野郎！ 治してやるから出てこい！」

そう叫ぶ声が響く森の中を、一人の痩せた少年が駆け抜けた。時折振り返り、茂みの中へ消える。

隠れた少年は、必死に息を殺して身を縮めた。彼の膝は、泥や傷のせいで黒ずんでいた。が、一番に目を引くのは、漆黒の毛髪だった。彼は、その髪を、自分の存在を、樹の影が隠してくれることを祈った。

「ナアアアッシュ！ そこに隠れてんだろ、なあ！」

上から怒声が降って来た。

少年ナッシュは、答えなかった。石のように、身を硬くする。

「いた？」

さつきよりも幼い少年の声。

「絶対この中にいるぜ。育ての丘からは出られないからな。おい、投石器を持ってこい！」

首領の少年が怒鳴った。「石をぶち込めば、いずれ出てくるはずさ」

ナッシュは、胃がすくみ上がった。すると、数歩先で、葉が殴られるような音がした。石が、葉をかすめたのだ。

「出てこい！ お前の呪い、解いてやるって！」

(どうか。君らの、その猿みたいな喚きの呪いのほうが、解いてもらうべきだ
と思うよ)

ナツシュは思いながら、石がやって来た方を睨み上げた。

「おい、ナツシュ。魔法動物に呪われたやつは、十二歳まで生きられないんだ
ぜ！」

「だから、俺たちがといてやるんだってば！」

「見習いになる前に死んじゃうよ！」

そんな言葉とともに、石がどんどん飛んできた。当たりはしないにしろ、近くの幹にぶつかると、ナツシュはさすがに頭を守った。唇をかむ。

アバルバン谷のことを話してから、ナツシュは毎日、毎年、いま起こっていることが続いていた。一人のアベドを七年間追い回している彼らには、皆勤賞を与えたいくらいだと、ナツシュは苦々しく思った。しつこすぎて、もはやいじめではなく習慣にまでこぎつけたのが、やつらのすごいところだった。あいつら、どれだけ暇なんだろう。

アバルバン谷のことは、おかげさまで、ナツシュの頭の中では、湿った布団に生える黒カビみたいに、とつてもとれない思い出になっていた。

(やっぱり、話すんじゃなかった)

ナツシユは、逃げようか、このままやりすごすか、考えた。

「この場合、反撃したら、不利だぞ、ナツシユ。やつらは上にいるんだから」
体の震えを抑えるために、ナツシユは、ぶつぶつ呟いた。「ピクランタがいつも
言ってるだろう。『逃げる場所は、必ずある。たくさん助けを求めていいんだ』
って」

あたりを見渡す。いま動けば、絶対に居場所がばれてしまうだろう。機会を待
つんだ。足がしびれてくる。耳の近くに、石が飛んでくる。

「ねえ、もっと投げるもの、ない!？」

その言葉とともに、足音が遠ざかった瞬間、ナツシユは再び走り出した。

「あ! いた!」

「あそこだ!」

「逃がすな!」

だが、ナツシユは、濁流のように次々と倒木を越え、樹の影にまわりこんだ。
少年たちが追いかけてくる。けれど、彼らはあまりにも興奮し、途中で転ぶ者も
出てきた。泣き声が響き渡る。

首領の少年の怒声が飛んできた。

「おい、そっちから行くな! 先回りしろ、先回り!」

だが、すでにナツシユの姿は、どこにもなかった。首領の少年は先頭に躍り出

て、坂を見下ろすと、舌打ちした。

「意気地なしめ」

眼下には、鮮やかなクウェクト石の庭が広がっていた。守りの人や、子どもたちが遊ぶその場所に、追いかけていた黒髪の少年がいた。

「どうする、蜘蛛」

仲間と呼ばれ、首領の少年は振り返った。

「いまのうちに、ぶつきたいものをたんまり集めとけ」

仲間たちは、楽しそうに笑みを浮かべて、森の中に消えた。

蜘蛛は、長い手足を折りたたみ、突き出た岩の上から、ナツシュを見下ろした。

「呪われ野郎が」

クウェクト石の庭に紛れ込んだナツシュは、そこで行われていた勉強会に飛び入り参加した。講師である守りの人と、そこに集まるたくさんの子どもの中にいれば、さすがの蜘蛛たちもやって来れないだろうと踏んだのだ。

（我ながら、頭のいい作戦だぞ、ナツシュ！）

ナツシュは、心の中でほくそ笑んだ。膝の黒ずみを、一生懸命擦って落とす。

同時に、長年胸に巣食う悲しみも擦り落とそうとした。

子どもたちは、二十人ほど集まって地面に座り、椅子に座る守りの人を見上げていた。

守りの人は、エイネーの仕組みや、言葉について話しをしている。ナツシュは、端っこで泥を落としながら、痛む足の具合を確認した。

「……そうして十二歳になった次の春。みんなは保育部屋を出て、見習いになります。みんな、見習いのことは知ってるかな？」

「知ってる。勉強すんだ」

前の方に座る少年が、鼻をほじくって言った。

「ええ、そうよ。みんなはいずれ、八つある仕事人のうちのどれかになるの。見習いは、その準備期間。だから、たくさんのことを学ばなければなりません。動植物学、植物学、読み書き、星読み、歴史、料理や……」

「あんだ、草臭いよ。どこの子？」

隣の女の子が話しかけてきた。

「南の育ての丘」本当は北だったが、ナツシュは嘘をついた。

女の子は、ナツシュを上から下までじろじろ見た。

「草役の演劇でもするわけ？」

「まあね。名前のない役が、いまは落ち着くんだ」

女の子は首を振って、それ以上つつこんでこなかった。ナツシュは、ほっとし

た。ここに集まっているのは近所の子たちではなかった。自分を知るアベドがないのは安心だ。でなければ、また追いかけてこがはじまるだろうから。

「……見習い村には、四つの学舎があるのを知っているかしら。北熊学舎、西穴熊学舎、南鶴学舎、東梟学舎。そこで学び、めでたく卒業できたら、みんなは仕事人になり、立派なアベドの仲間になれるんですよ！」

守りの人は、手を叩いて見渡した。

「さて、ここで質問。みんなはどんな仕事人を知っているかな？」

子どもたちは、一斉に喋りはじめた。「獣の人！」「はい、薬の人！」「守りの人！いま、目の前にいる！」

その中で、切り株のように寸胴な少年が、「狩りの人！」と怒鳴った。

「はいはい。じゃあ、でっかい声で言ってくれたので、今日は、狩りの人の話をしましょう。ええと……、彼らの仕事は、食糧を調達することよ」

ナツシユは、靴を脱いで、砂を落とした。

「食料調達は、体力のあるアベドが担うことが多いわ。それに、とても危険なの。なぜなら……」

ナツシユは、守りの人がためを作ったので、思わず顔を上げた。

「エイネーからずっと離れた、デイゴンネーという場所で狩りをするからよ」

「ああ、俺、知ってるぜ！」

切り株少年が言い、「知ってる、知ってる」と何人かも頷いた。

「じゃあ、デイゴンネーが、初代女王エイネンナムの生まれ故郷だったことは知っているかしら？」

とたん、みんなはぽかんとした。守りの人は、頷いた。

「では、ここで想像して……大昔のことよ。まだ馬便もなかった時代。

……デイゴンネーは、エイネー国を作り上げた、初代女王エイネンナムが、最初に住んでらっしゃったところでした」

子どもたちは、体をゆすって座り直した。ナツシュも、足の裏をいじるのをやめて。少し前に進んだ。

「しかし、そのうちデイゴンネーは、巨大な生きものが徘徊する、恐ろしい世界に変わってしまったのです。中でも、ヌロウドという民は、しばしばエイネンナムの仲間を食べる、あくどい種族でした。さらに、気候はどんどん変わり、エイネンナムたちにとって、大変住みづらい所となったのです。

エイネンナムは、平安を求め、仲間と共に船を出しました。あの大魔導師アケラスも、この旅に入っていたと言われています。そうして見つけた島が、このエイネーだったのです」

守りの人は、両手を広げた。

「はじめのエイネーには、九匹の魔法動物と、少数のエイネーアベドが暮らして

いました。九匹の魔法動物は、その強力な魔力で他の魔法動物たちに威張ってばかり、また、エイネーアベドも、食べて笑って遊んでばかりで、何もしていませんでした。

エイネンナムは、そんな彼らに、島に住むことを許してもらおうと、ある約束をもちかけました。それが、自分の魔力で、島とエイネーアベドをヌロウドから守り、この場所を譲ってくれた九匹の魔法動物に、感謝を捧げる国をつくろうというものだったのです」

「九匹の魔法動物って、なに？」

右手の方に座る、神経質そうな少年が、足を揺らして訊ねた。

「あら、仕事人の象徴になっている魔法動物よ。それが九匹の魔法動物……通称、主^{あるじ}よ。私たち守りの人は、〈守^{ベニヨウス}〉という魔法動物を主^{あるじ}としているわ。ほら、誓いを立てるときやなんかに〈守^{ベニヨウス}〉の名を聞くでしょう？

主^{あるじ}は九匹だから、八つの仕事人と、魔導師様の象徴になっているの」

「それで！ 狩の人は！」

切り株少年が、声を上げた。

「そうだったわね。……ええと……ああ、なぜ狩りの人がデイゴンネーに行くのか、っていう話だったわね。

エイネンナムは、とても強い魔力と魔法の才能をもち、指導者にふさわしいアベ

ドでした。彼女は、みんなに望まれて、エイネー国最初の女王になりました。：しかし、問題が一つありました」

ナッシュは、鼻にとまろうとした羽虫を、手を振って追い払った。こいつにも耳をくっつけてやれば、いまいいところだっていうのがわかるだろうに。

「エイネンナムは、ずっとエイネーアベドの狩猟採集に頼っていましたが、それでは食料が賄えなくなっていたのです。エイネーに生息するハールン牛やエイネー馬、ルードルという鳥は、すべてデイゴンネーのものに比べたら小さく、みんなに行きわたりませんでした。

そこでエイネンナムは、危険を覚悟で、再びデイゴンネーへ行くことを決意しました。大きな獲物を狩るため、そのときだけデイゴンネーへ行くのです。

それを実現させるのに、大変な時間がかかりましたが、ついに女王は、デイゴンネーとエイネーを行き来する魔法陣を作り上げました。魔法陣は、海を渡ることなくデイゴンネーへ飛ぶことができます。もちろん、エイネンナムは、ヌロウドがこちらに来ないように、お守りのまじないをかけることも忘れませんでした。こうして、デイゴンネーへ狩りの仕事をする狩りの人ができ上がったのです。アベドの増加にともない、魔法陣は、静寂草原という場所に次々と作られました。初期の魔法陣は、今でも残されています。エイネーの北の、その奥地に……」

子どもたちは拍手した。切り株少年は、口笛を吹いた。守りの方は、笑みを浮

かべた。

「今でも狩りの人がデイゴンネーへ行くのは、エイネー産のものだけではやっていけないからなの。みんな、食べ物には狩りの人の戦いが詰まっているのよ。狩りの人への感謝は、いつも忘れずにね」

「ねえ！ あたしね、つくりの人知ってるよ。服とか指輪とかを作るの！」

一番前に座る女の子が、守りの人の裾を掴んだ。

すると、別の少年が割り込んだ。

「俺は獣の人を知っています！ 狩りの人の護衛をするんですよ。俺の（育ての者）の友達がそうなんだ！」

言い終わらぬうちに、次々と子どもたちによる知識お披露目大会がはじまった。あまりの騒々しさに、守りの人は、「ちょっと、いっぺんに喋ったらわからないわよ」と手を振った。

と、だれかが「影の人の話をして！」と叫んだ。

微妙な沈黙が、あたりを包んだ。

守りの人は、顔を強張らせ、「ほんとに聞きたいの？」と言った。

「でも、とても大切な話だから、もうみんなにも話していいかもね。……みんな、いい？」

子どもたちは身じろぎをした。ナツシュは、蜘蛛との戦いをすっかり忘れて、

守りの人の話にのめりこんでいた。……次になにが語られるかも知らずに。

「影の人は、有魔力者である、王家光シスルアの民と魔導師様しか見ることができないの。みんなが見ようとすると……目が見えなくなってしまうんですって」

ナツシュの腕に鳥肌が立った。他の子たちは小さく悲鳴を上げたが、ナツシュはそれどころではなかった。

「影の人は、エイネーの隠れた助言役として、光シスルアの民や魔導師様たちだけに、その言葉を伝えます。光シスルアの民や魔導師様も、エイネーのために、助言を求めに行くこともあるのよ」

「どこに行くの？」ナツシュの隣にいる女の子が問うた。

「影の地という場所よ。そこが、影の人のお家なの。みんなは行くことができないけれど、影の人には、一度だけ会うことができるわ」

ナツシュは、聞きたいような、逃げたいような気持ちになった。

「いつ？ いつ？」と子どもたち。

「見習いを卒業した夜よ。どれがふさわしい仕事人か教えるために、影の人は、枕元にやってくるの」

子どもたちは騒ぎだした。

「はいはい！ みんな落ち着いて。影の人は、私たちのことをなんでも知っているわ。騒いでいることも、きっと知っているはずよ」

みんなは黙った。鳥が、どこか遠くで鳴いた。

「みんなの枕元には、仕事人の石というものが置かれるわ。それで、どの仕事人になったかがわかるの」

守りの人は、示すように、襟元についている金色の徽章をつまんでみせた。

その輝きは、ナツシユもよく知っていた。ピクランタもつけているからだ。そ

こには、主^{あるじ}である〈守〉^{ベニヨウス}の姿が彫^{ベニヨウス}ってあった。〈守〉^{ベニヨウス}は、木のうろ顔がついた毛布という感じで、楕円を両腕で抱いていた。

ナツシユは、あれが自分のもとにくるときを想像した。そして、自分が影の人に訊ねる瞬間を。

「あなたは、以前、アバルバン谷で僕と会いましたか？」

とたん、ぶああああつと過去の記憶が押し寄せ、ナツシユは息が苦しくなった。守りの人の声が、遠くで聞こえる。

「……もちろん、影の人のことを見てはだめよ。ええ、私も、小さい時に訊ねたことがあるわ。『どうして?』って。

私の〈育ての者〉は、こう教えてくれた。『見てしまった者は、仕事を与えてもらえない。反対に、罰が与えられてしまうよ』ってね……」

そこでナツシユは、はっと後ろを振り返った。

真っ黒い鴉が、庭の木で鳴いていた。鴉は、身を揺らして鳴いたのち、軽やか

に飛び立った。

ナツシユの心臓は、だが、まだ激しく打ち続けていた。

「なあ、聞けよ、ナツシユ。お前はいい子だ。だから、こういうことが起きるのはお前のせいじゃない。わかるな？」

「ありがとう。わかってるって」

一日が終わり、寝台に横になろうとしたナツシユは、ピクランタに擦り傷を発見されてしまった。しかたなく治療してもらったが、いつまでこんな生活が続くんだろうと思った。自分が情けなかったし、哀しい顔をするピクランタを見るのは耐えられなかった。

「ねえ、ピクランタは、影の人のことどう思う？」

傷についてなにか言われる前に、ナツシユは訊ねた。布を巻かれた膝を、さっさとかけ布団で隠す。

ピクランタは、ためらいがちに本の整理に戻った。この本の整理には、理由があった。ナツシユが、あと半年でここを出なくてはならないからだ。出た後は、ナツシユは見習いの村というところに住み、ここは他の子どもものものになる。

ピクランタは、細い腕で、本棚から要らない本を抜き出していった。

「勉強会で、その話があったんだな？ どう思うもなにも、影の人は影の人だよ。俺たちがなるべき仕事を教えてくれる。ありがたい存在だ」

「ふうん」

「見習いになったらわかる。それがどれだけすげえことかっ……。仕事人の石をもらったときもそうだった。すごく……。感動したよ」

ピクランタがそれ以上話そうとしないので、ナツシュはせつついた。「ねえ、話してよ！」

「わかった、わかったよ」ピクランタは懐古の笑みを浮かべた。「……ええと、あれは十うん年前のこと」

「二十うん年じゃないの？」

「黙っとけ、ナツシュ。……十うん年前のその朝、俺は、すぐに仕事人の石を見つけられなかった、枕をひっくり返して、布団を剥いで、必死に探した。そこで、硬く、高い、カキーンって音がしたんだ。俺はようやく、床に金色の石が――記章が落っこちているのを見つけたよ。俺は、急いで確認した。」

描かれていたのは〈ベニヨツメ守〉だった。驚いたけど、納得のほうが強かったな。だって、たくましくも、たいして賢くもない俺が、狩りの人や師の人になるわけがないと思っただ。

だから、守りの人になって、正直ほっとしたよ。デイゴンネーで死ぬ羽目になっ

たり、難しい公式や歴史を覚えなくて済むからな！

だから、今でも俺は、この仕事人でよかったと、影の人に感謝しているよ。お前にも、会えたしな」

ピクランタは、本の山を、一冊の本でぽんぽんと叩いた。

「他の仕事人になりたいって思ったこと、ある？」

ふとしたナツシユの質問に、ピクランタは、飛び上がった。

「えっ、何!? あるわけないだろう。だって、影の人が決めることはさ、とんでもなく重大で、広くて、深くて、俺たちの理解の及ばないことなんだぜ？ つまりさ、影の人が教えてくれることは間違いがなく、真実ってことじゃないか。なのに、他の仕事人になりたいと思うことは、失礼なんじゃないか？」

「ああ……、そうか」

「そうさ。だからナツシユも、ちゃんといい子でいて、ぴったりの仕事人にしてもらえ。それからまた、ここに遊びに来たらいいさ。何になるか楽しみだな！」

ナツシユは「うん」と答えながら、土の天井を見つめた。

アバルバン谷を考える。眠りのアベドのことを考える。けれどナツシユは、なにも言わなかった。

この天井の下にいつまでもい続けることはできないんだろうか、彼は思った。友達がいなくてもいいのに、これから新しく友達を作るなんて、海の底で激しく踊る

くらい、重く、不可能に近かった。

蜘蛛と同じ学舎になったら、それこそ終わりだ。このままずっと、仕事人になっても一人ぼっちだったらどうしよう。それなら、ピクランタと一緒にここで仕事をした方がいいのかもしれない……。

「ねえ、ピクランタ。僕、ここにずっといて、勉強もピクランタから教わって、ここで働くことにするよ」

ふるふる首を振りながら、ナツシュは言った。「え？」とピクランタ。困惑しているのが、天井を見ているナツシュにもわかった。

「ナツシュ、それは……」

「僕、洗濯物を干せるよ。料理も頑張るし、かぼちゃたちみたいな子どもの遊び相手だってできる」

「ナツシュ、ナツシュ、ナツシュ」

ピクランタの手がナツシュの腕を掴んだ。ピクランタの柔らかな瞳が、ナツシュのすべてを捉えた。

「ナツシュ、聞け。怖いのはわかる。だが、ここで働くことを考えるなんてやめろ。お前はまだ子どもで、働くことなんて考えなくていいんだ。お前は、うまい料理とか、気持ちいい風とか、おもしろい冗談とか、そういうことだけに目を向けていていいんだよ。今は考えられなくても、すぐでなくとも、状況は必ずよく

なる。本当さ。だから、無理して働こうとするな。自分が何になるかは、影の人が教えてくれるから」

「でも、僕、見習いになりたくないよ」

「お前が思っている以上に、いいアベドはたくさんいる。本当だ」

ピクランタの柔らかな目は、ナツシュの恐怖を吸い取った。ナツシュは、彼の首に抱きついた。細くて、皮しかない首。ごつごつと骨ばかりが浮き出ている。それでも、ピクランタはナツシュにとって、唯一頼りになる〈育ての者〉に変わ
りない。

「なあ、この本、見習い村に持って行けよ『尾骨獣の大戦』。これ、好きだったよな?」

ピクランタは、灰色の厚い本を差し出した。ナツシュは、表紙の巨大な骨の絵を撫でた。真ん中の楕円の中には、砂漠が描かれている。ナツシュにとってそれは、唯一の友人と言ってもよかった。

「見習い村に住むことになっても、なにか好きなものを持って行けば、安心だろ?」

「本なんか持って行ったら、馬鹿にされそうだけど」

「そんなことない。本は精神の結晶だぜ? それに、俺の友人は、赤ん坊の頃の掛布団を持ってきていたぞ」

二人は笑った。「まあ、なんだっていいんだ。宝物は」とピクランタ。

ナツシュは、そのまま、寝台の中で『尾骨獣の大戦』を読んだ。厚い表紙をめくり、はじめの文章を読み、次の動きを目で追う。風景が頭に広がりはじめ、本に生きる者たちの息遣い、思惑、願いなどが聞こえはじめる。

その世界の中では、自分はいじめられっ子のナツシュではなかった。戦いの匂いを運んでくる風であるし、勇気を与える太陽であるし、地を駆け抜ける屈強な戦士であるのだ。

そのわきで、ピクランタは本の断捨離をすすめた。

赤い表紙の絵本を見つけた彼は、ふと手を止めた。すり切れて埃まみれのその本は、『大魔導師アケラス 七色の鳥を追って』だった。

ピクランタは、ナツシュを振り返った。かつて壁の穴に寝ていた赤ん坊は、いまや寝台に一人で寝て、文字を追う物語の旅人となっている。

〈育ての者〉は、力なく微笑み、絵本を捨てるものに分類した。

「じゃあ、おやすみナツシュ。また明日な」

「ん」

ピクランタは本の束を抱え、保育部屋を出た。石灯の光の中、ナツシュは夜中まで本を読み続けた。

「……また蜘蛛だぜ。きつと。逃走劇をやったんだ」ガルドの静かな声がした。

「お上に相談したのか？」

「何度もしてるさ」怒気を含んだピクランタの声。「一度おさまっても、俺たちのいないところでまたはじまる」

その後、ガルドが聞き取れないほど小声で言った。「半年の辛抱だ」

ピクランタが腕まくりをする音がした。しばらく、ためらう沈黙があった。

「現実をつきつけて悪かったな」ガルドが弁解した。

「いや。わかってるよ。ただ、やっぱり……」

「いいほうに考えろ！ ナツシュが見習いになれば、彼も新しい友だちを作りやすくなる。いけ好かないやつとだって、離れられるんだ」

「同じ学舎になったら大変だろう」

「平気さ！ 見習いになれば、宿題、勉強、課外実習、忙しくて、ナツシュは注目を免れるぜ。案外、保育部屋よりも楽しくやるかもな」

「……まさか、あの話ひとつで、こんなに長引くなんて……」

「お前のせいでも、ナツシュのせいでもねえよ。けど、諦めるな。一人じゃねえ……」

二人の声は、遠ざかっていった。

本を読んでいたナツシユは、静かに石灯いしひの扉を閉めた。

あと半年で、保育部屋生活は終わる。そのあと、自分がどうなるか、まったく予想ができなかった。

ナツシユは、影の人に祈ろうかと思ったが、眠りのアベドと重なり、恐ろしくてできなかった。

だから、虚無に向かって無言で叫んだ。

(どうか僕に友達を！ 追いかけてたりけったりしない友達を、一人でもいいからください！)

ナツシユは涙を流した。